研推だよりNo.12

令和４年
８月３１日
研究推進部会

前号の№１１でも書きましたが、まもなく２学期を迎えるということで、研究推進部でも２学期以降の研究をどうしていくか、ということについて考えました。**１学期、先生方にたくさんご協力をいただいて、新しい研究を少しずつ進めていくことができたように思います。ありがとうございました。**これまで進めていく中で成果として継続していく部分もある反面、**「どうしたら先生方も、もっといきいきと、わくわくしながら研究に取り組めるようになるかなあ」**ということも正直考えた１学期間でした。

研推だよりを発行している私が、校内研究を推進していく立場の一人としていつも考えていることは次の３つです。

①児童の課題改善　→　一人一人の授業力向上
②同僚性の構築
③授業を見合い語り合う学校文化の形成

この３つは校内研究に対する**個人的な信念**のようなもので、自分の理想ともいえます。**①の「児童の課題改善」**は、多くの先生方も同じように考えてらっしゃると思います。外部に出かけたりして自己研鑽を積む研修という要素に加えて、校内研究という取組には**顔の思い浮かぶ１人１人の児童**がいます。校内で研究に取り組む際には、やはりこの子達をどうやって高めていくか、成長させていくかという視点が欠かせません。そして**子供たちの課題を改善する教材の開発や学習方法を検討していくことは、その後の自分自身の授業力の向上につながっていきます。**

また**②の「同僚性の構築」**は、同じ職場で働く仲間として共に支え合ったり高めあったりする関係性を意味しています。言い換えれば**「みんなで力を合わせよう」という気持ちを校内全体でさらに醸成していくこと**です。校内研究は、研究授業の準備や環境整備、時には発表に向けた準備など一人一人が抱える仕事量の増大に意識が向いて、お互いに助け合うところまでいけずにみんなあっぷあっぷになる…なんて話もよくあります。**「お互いみんな忙しいし、自分で指導案書かないと…」「ちょっと授業のことで相談あるけど、忙しそうだからやめておこう」**などと、どんな仕事にもすべて一人で解決しようとする気持ちになってしまうと、どうしても普段の授業準備や教材を工夫する、というところまで意識は向きにくくなってしまうのではないでしょうか。かく言う私も研究に関しては**「みんなをリードしないと…！」**という気持ちでやってき　たことが多くて、１人で空回りすることも多かったように思います。その中で**「形式ばった研究スタイルに陥ってないか」「突っ走りすぎて、学校みんなでやっていくのに疲れてしまわないか」「三小としてどのような研究にするのか、不明瞭のままではないか」**のようなことを夏休みに自問自答していました。しかしこの状

況を実際の授業に置き換えて考えてみると、**「教師が一人であれこれ考えていてもいい授業はできないな、それと同じことなのかもしれない」**と考えるようになりました。困ったときはお互い様、ではありませんが、やはり**同じ目標に向かって取り組んでいる先生方みんなでアイデアを出し合ったり話し合ったりしていく中でよい研究は生まれてくるものだ**と思います。お互い忙しい時こそ助け合って、みんなで取り組んでいく研究にしていきましょう。

③も②と似ています。**私は、放課後の職員室が授業の話でいっぱいになるといいなと思っています。**教師という職業は、独力で研鑽を積み重ねていっても、独りよがりの授業になっていては進歩はどこかで頭打ちになる気がします。自分の授業スタイルを大切にする気持ちは大切ですが、**自己流にこだわらず他の先生方のやり方や教え方を取り入れて絶えずよりよい指導法を目指していく**ことも教師という仕事の本分だと思います。授業を見ると自分が授業をするだけでは気付かなかったことに気付きます。また、誰かに授業を見られると、いつもの指導でよいのかをふり返ったり、ちょっとした工夫を取り入れたりするものです。放課後に、自分が見た授業についてコーヒーを飲みながら、相手の先生と話題にしてみるのも素敵ですよね。そういったことが学校の色々なところで見られる雰囲気にしていけたらな…と思います。

ここまで書いたことは私が考えていることをちょっと知ってもらうために書いたもので、決して強制したり押し付けたりするものではありません。でも**せっかく「校内研究」という取り組みを行っているのですから、マイナスなイメージをもったまま、いつまでも惰性でやっていくのはもったいないと感じます。校内研究を通じて学校をもっとよりよくできることは何か、これからも前向きに先生方と一緒に取り組んでいきたい**と思っています。

1　もうすぐ２学期　ここから校内研究も Re-Start していきます！

学校の教育活動において、当たり前をそのままにしない、当たり前を疑う、当たり前を見直す、ということは大切だと思います。（向かい風が吹き気味の研究などはなおさらそうです）

意味があることを継続して取り組んでいくことが大切であるのと同じように、意味や目的を失った前例踏襲をスクラップしていくことも大切です。前例踏襲は不満を感じにくく、楽なことが多いですが「それを何のためにやっているのか？」という意味や目的を問い直し、私たち一人一人が安住の地を捨てていくことで、楽しみでわくわくする研究、誇りをもてる研究に近づく気がしています。

ということで、１学期の研究をふり返り、改善していけることを研推で話し合いました。それが以下の９個の「Re-Start」です。２学期からの研究は、全校でこの形で取り組んでいきたいと思います。

Re-Start１　指導案の押印をやめる

ご指導のお願いということで押印をするのは講師・管理職の３部のみ。校内で配布するものは原本に１部だけ押印し、それをコピーにする。

Re-Start２ 毎度毎度の講師紹介をやめる

講師の先生と初めてお会いする最初の第１回だけ詳しく紹介する。あとは校長挨拶のみにして、その分を協議する時間に充てる。講師の先生に関係して何か話をする時は、校長先生が必要だと感じた時だけにする。また協議会中は校長先生、副校長先生もいつでも発言してよいこととする。

Re-Start　3　お茶出しをやめる

授業日が流動的な中で毎回主事さんにお願いするのは申し訳ないし、こちらも連絡を落としやすい。例えば協議会会場用のお茶については、残りの授業回数分をペットボトルのお茶と紙コップ等を買いだめしておく形にする。

Re-Start　4　分科会提案は前日までに言う

授業を見る前に、どのような意図があって手立てを講じているのかを、参観者も共有しておいた方がその後の協議でも生きてくる。協議会そのものの時間も短縮できる。提案は前日の夕会等、授業前に行うようにする。指導案もその時点までのもので良いので、一度 C4th にあげる。

Re-Start　5　講師の先生のお話は３０分

研究主任や授業者の方から、事前に授業やメール等で授業に関わる手立ての話題を伝えておく。その後急な変更等があった場合も授業前に校長室で研推より講師の先生にお伝えして、講話を焦点化する。

Re-Start　6　名称を「研究授業」じゃなくて「話題提案授業」にする

「研究授業」ではなく、「参観者が学ぶために授業者が話題を提案する授業」という意識で行えるようにしたい。「どこがよくなかった。もっとこうすればよい」ではなく、「自分だったらこうやってみようかな」という視点で協議する意識を高める。

Re-Start　7　研推だよりは週１回の定期発行にする

連絡事項だけでなく、研究の深まりに関わることを情報発信・共有していく。週１回に定期的に出していくことで、１つのおたよりに載せる情報量を多くしすぎないようにする。

（そのうちエッセイみたいなのも載せて、みんなで読み合う文化ができるといいな…と思っています）

Re-Start　8　「授業やります！」ボードの設置

強制じゃないし、見せる用の「すごい授業」である必要もない。チャレンジングな授業で大失敗してしまっても、それがまた気軽に授業を見合える雰囲気づくりに役立つはず。書きたい人、

見てほしい人がいつでも気軽に書ける意識で。協議会はしない。放課後など、それぞれ自分の都合がいい時に３分でもそれとなく話しかけてみる。

Re-Start１０　「MMM（みんなで　もちよる　My 実践）」の時間確保

ＩＣＴに関わることを、先生方みんなで紹介・共有する時間をつくる。最初は月に１回くらいのペースで、１５分程度の時間で実施する。授業でトライしてみてどうだったか（うまくいった、難しかった、慣れればできそう、などなど）トライできた人だけでよい。毎回必ず報告する必要もなく、「今度こんなことやってみたいと思うんだけど…」という相談も、もちろんＯＫ。